

Ⅱ 調査結果の概要

1 発育状態

(1) 身長（表1，図1，表2，図2）

① 平成30年度の男子の身長（全国平均値。以下同じ。）は、9歳、11歳及び15歳で前年度よりわずかに高くなっている。また、8歳、10歳、12歳及び13歳で前年度の同年齢よりわずかに低くなっている。その他の年齢では、前年度と同じ数値となっている。

女子の身長は、5歳、11歳、12歳及び14歳で前年度よりわずかに高くなっている。また、6歳で前年度の同年齢よりわずかに低くなっている。その他の年齢では、前年度と同じ数値となっている。

② 平成30年度の身長を親の世代（30年前の昭和63年度の数値）と比較すると、最も差がある年齢は、男子では12歳で1.8cm，女子では11歳で0.9cmそれぞれ高くなっている。

③ なお、男子、女子共に昭和23年度以降、伸びる傾向にあったが、平成6年度から13年度あたりにピークを迎え、その後おおむね横ばい傾向となっている。

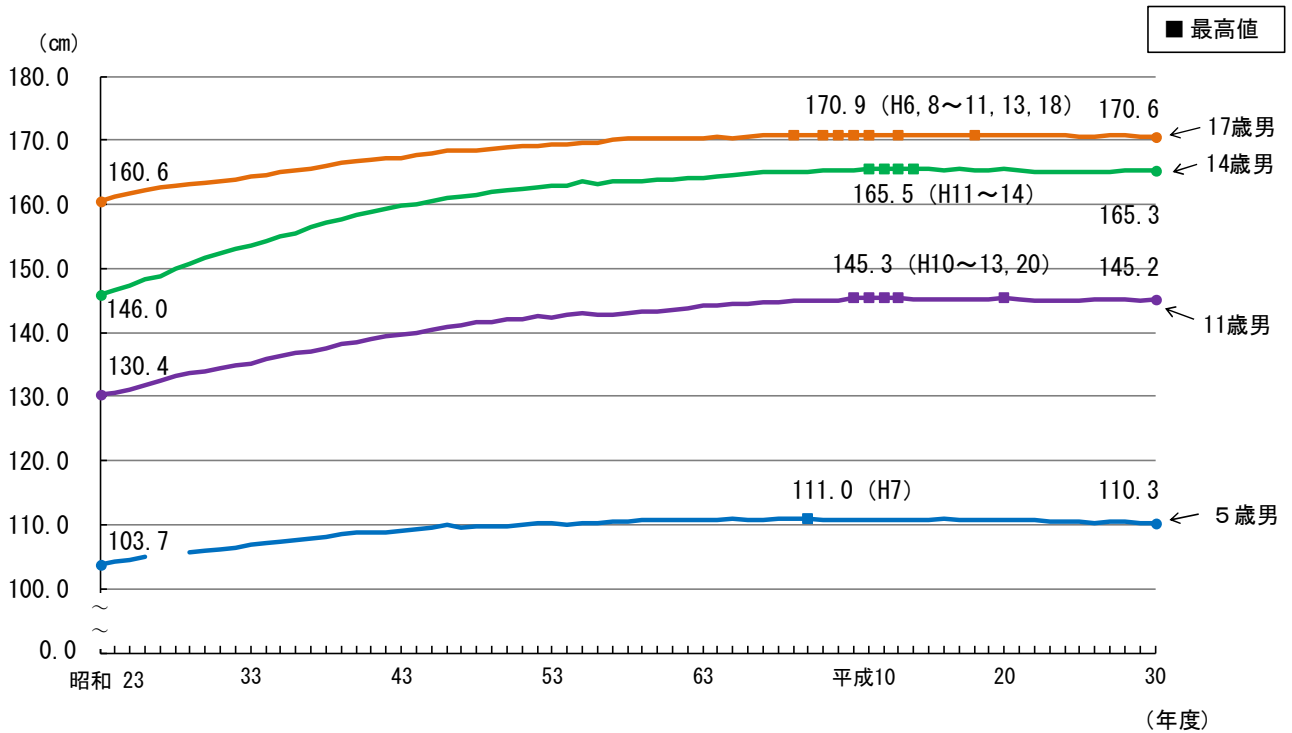
表1 年齢別 身長の平均値

			(cm)				
区 分			平成30年度 A	平成29年度 B	前年度差 A－B	昭和63年度 C (親の世代)	世代間差 A－C
男	幼稚園	5 歳	110.3	110.3	0.0	110.8	△ 0.5
		6 歳	116.5	116.5	0.0	116.7	△ 0.2
	小学校	7	122.5	122.5	0.0	122.3	0.2
		8	128.1	128.2	△ 0.1	127.9	0.2
		9	133.7	133.5	0.2	133.0	0.7
		10	138.8	139.0	△ 0.2	138.2	0.6
		11	145.2	145.0	0.2	144.1	1.1
	中学校	12 歳	152.7	152.8	△ 0.1	150.9	1.8
		13	159.8	160.0	△ 0.2	158.4	1.4
		14	165.3	165.3	0.0	164.1	1.2
	高等学校	15 歳	168.4	168.2	0.2	167.7	0.7
		16	169.9	169.9	0.0	169.6	0.3
		17	170.6	170.6	0.0	170.3	0.3
女	幼稚園	5 歳	109.4	109.3	0.1	110.1	△ 0.7
		6 歳	115.6	115.7	△ 0.1	115.9	△ 0.3
	小学校	7	121.5	121.5	0.0	121.6	△ 0.1
		8	127.3	127.3	0.0	127.2	0.1
		9	133.4	133.4	0.0	132.9	0.5
		10	140.1	140.1	0.0	139.3	0.8
		11	146.8	146.7	0.1	145.9	0.9
	中学校	12 歳	151.9	151.8	0.1	151.2	0.7
		13	154.9	154.9	0.0	154.6	0.3
		14	156.6	156.5	0.1	156.3	0.3
	高等学校	15 歳	157.1	157.1	0.0	157.0	0.1
		16	157.6	157.6	0.0	157.5	0.1
		17	157.8	157.8	0.0	157.8	0.0

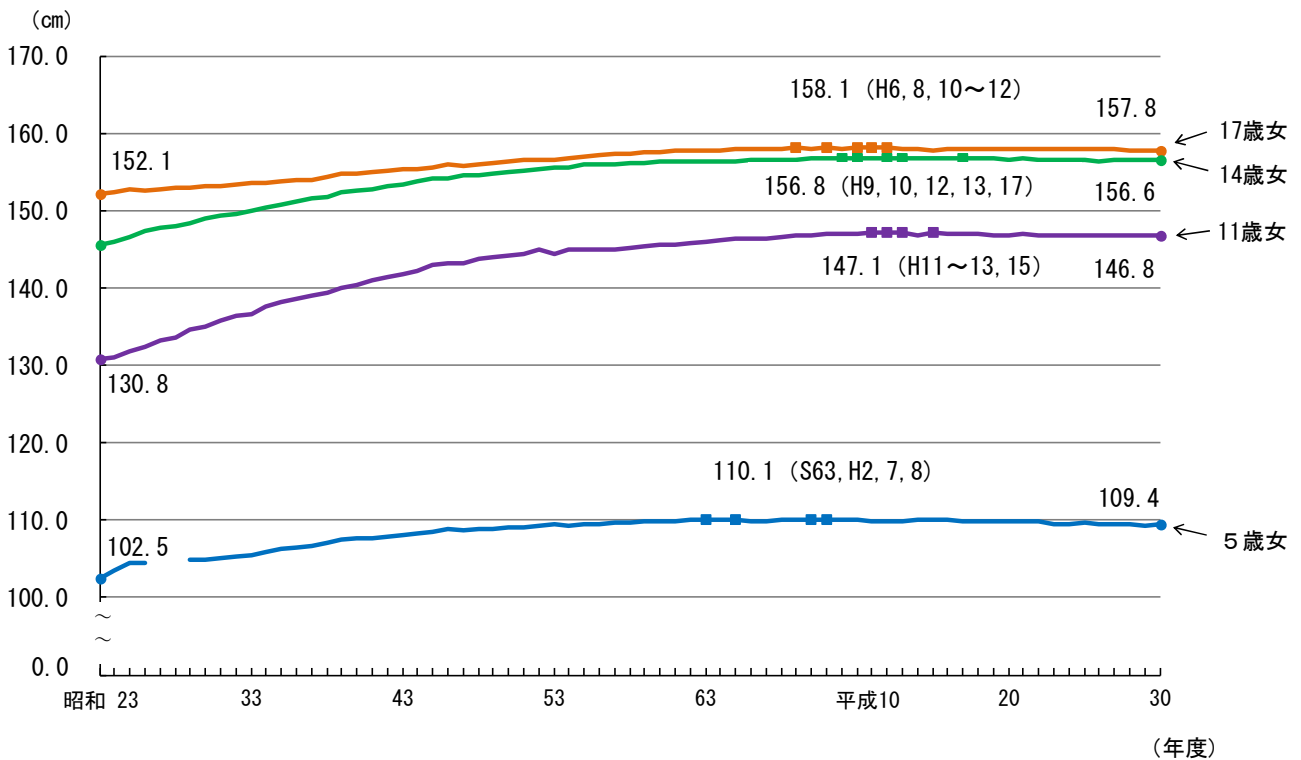
- (注) 1. 年齢は、各年4月1日現在の満年齢である。以下の各表において同じ。
 2. 網掛け部分は、5～17歳のうち前年度差及び世代間差の男女それぞれの増加分の最大値を示す。
 3. 「△」は減少を示す。以下の各表において同じ。

図 1 身長の平均値の推移

○男子



○女子



(注) 5歳については、昭和27年度及び昭和28年度は調査していない。

④ 平成12年度生まれ（30年度17歳）の年間発育量をみると、男子では11歳時及び12歳時に発育量が著しくなっており、12歳時に最大の発育量を示している。

女子では、9歳時及び10歳時に発育量が著しくなっており、9歳時に最大の発育量を示している。最大の発育量を示す年齢は、女子のほうが男子に比べ3歳早くなっている。

また、この発育量を親の世代（昭和63年度17歳）と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は親の世代と同じ12歳時となっており、5歳から7歳及び9歳から11歳の各歳時で親の世代を上回っている。

女子については、発育量が最大となる時期は親の世代より1歳早い9歳時となっており、5歳から9歳の各歳時で親の世代を上回っている。

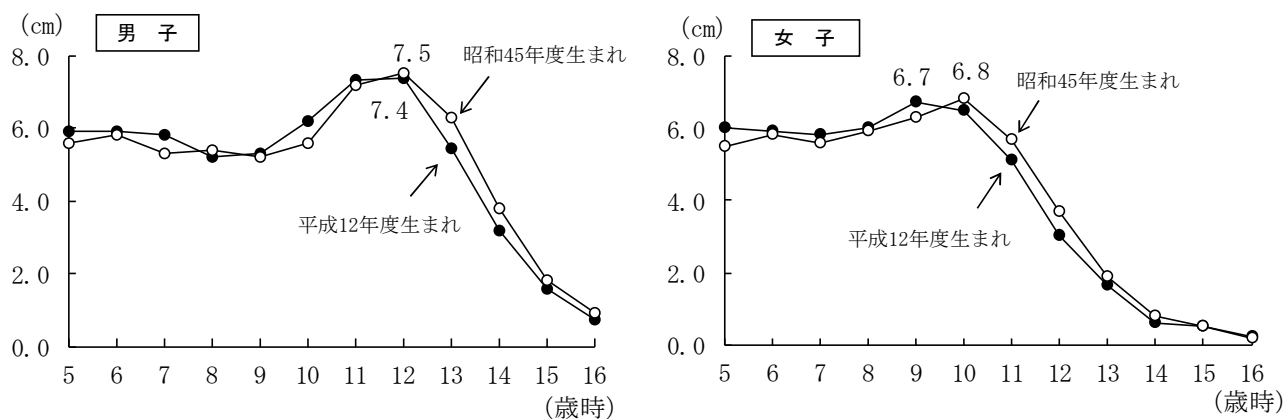
表2 平成12年度生まれと昭和45年度生まれの者の年間発育量の比較（身長）

区 分		男 子		女 子	
		平成12年度生まれ (平成30年度17歳)	昭和45年度生まれ (親の世代の17歳)	平成12年度生まれ (平成30年度17歳)	昭和45年度生まれ (親の世代の17歳)
幼稚園	5歳時	5.9	5.6	6.0	5.5
	6歳時	5.9	5.8	5.9	5.8
小学校	7	5.8	5.3	5.8	5.6
	8	5.2	5.4	6.0	5.9
	9	5.3	5.2	6.7	6.3
	10	6.2	5.6	6.5	6.8
	11	7.3	7.2	5.1	5.7
中学校	12歳時	7.4	7.5	3.0	3.7
	13	5.4	6.3	1.7	1.9
	14	3.2	3.8	0.6	0.8
高等学校	15歳時	1.6	1.8	0.5	0.5
	16	0.7	0.9	0.2	0.2

（注）1. 年間発育量とは、例えば、平成12年度生まれ（30年度17歳）の「5歳時」の年間発育量は、平成19年度調査6歳の者の身長から18年度調査5歳の者の身長を引いた数値である。

2. 網掛け部分は、5～16歳時のうち最大の年間発育量を示す。

図2 平成12年度生まれと昭和45年度生まれの者の年間発育量の比較（身長）



(2) 体重 (表3, 図3, 表4, 図4)

① 平成30年度の男子の体重(全国平均値。以下同じ。)は、9歳、11歳及び14歳で、前年度の同年齢よりわずかに増加している。また、10歳、13歳、15歳及び17歳で前年度の同年齢よりわずかに減少している。その他の年齢では、前年度と同じ数値となっている。

女子の体重は、9歳から12歳で前年度の同年齢よりわずかに増加している。また、6歳、14歳、16歳及び17歳で前年度の同年齢よりわずかに減少している。その他の年齢では前年度と同じ数値となっている。

② 平成30年度の体重を親の世代(30年前の昭和63年度の数値)と比較すると、最も差がある年齢は、男子では12歳で1.1kg、女子では11歳で0.6kgそれぞれ重くなっている。

③ なお、男子、女子共に昭和23年度以降、増加傾向にあったが、平成11年度から18年度あたりにピークを迎え、その後減少もしくは横ばい傾向となっている。

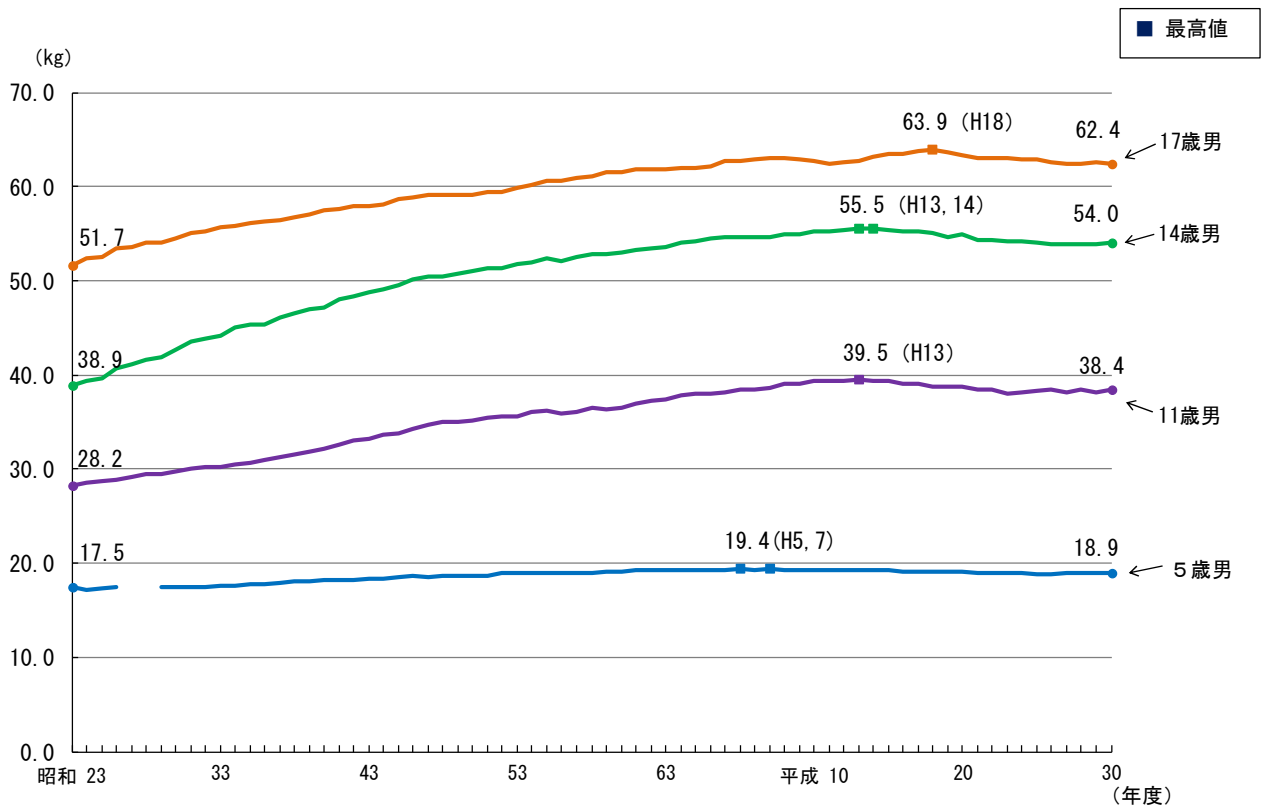
表3 年齢別 体重の平均値

			(kg)				
区 分			平成30年度 A	平成29年度 B	前年度差 A－B	昭和63年度 C (親の世代)	世代間差 A－C
男	幼稚園	5 歳	18.9	18.9	0.0	19.2	△ 0.3
		6 歳	21.4	21.4	0.0	21.4	0.0
	小学校	7	24.1	24.1	0.0	23.9	0.2
		8	27.2	27.2	0.0	26.9	0.3
		9	30.7	30.5	0.2	30.0	0.7
		10	34.1	34.2	△ 0.1	33.5	0.6
		11	38.4	38.2	0.2	37.4	1.0
	中学校	12 歳	44.0	44.0	0.0	42.9	1.1
		13	48.8	49.0	△ 0.2	48.3	0.5
		14	54.0	53.9	0.1	53.6	0.4
	高等学校	15 歳	58.6	58.9	△ 0.3	58.5	0.1
		16	60.6	60.6	0.0	60.6	0.0
		17	62.4	62.6	△ 0.2	61.8	0.6
女	幼稚園	5 歳	18.5	18.5	0.0	18.9	△ 0.4
		6 歳	20.9	21.0	△ 0.1	20.9	0.0
	小学校	7	23.5	23.5	0.0	23.3	0.2
		8	26.4	26.4	0.0	26.3	0.1
		9	30.0	29.9	0.1	29.6	0.4
		10	34.1	34.0	0.1	33.6	0.5
		11	39.1	39.0	0.1	38.5	0.6
	中学校	12 歳	43.7	43.6	0.1	43.6	0.1
		13	47.2	47.2	0.0	47.3	△ 0.1
		14	49.9	50.0	△ 0.1	49.9	0.0
	高等学校	15 歳	51.6	51.6	0.0	52.0	△ 0.4
		16	52.5	52.6	△ 0.1	52.7	△ 0.2
		17	52.9	53.0	△ 0.1	52.7	0.2

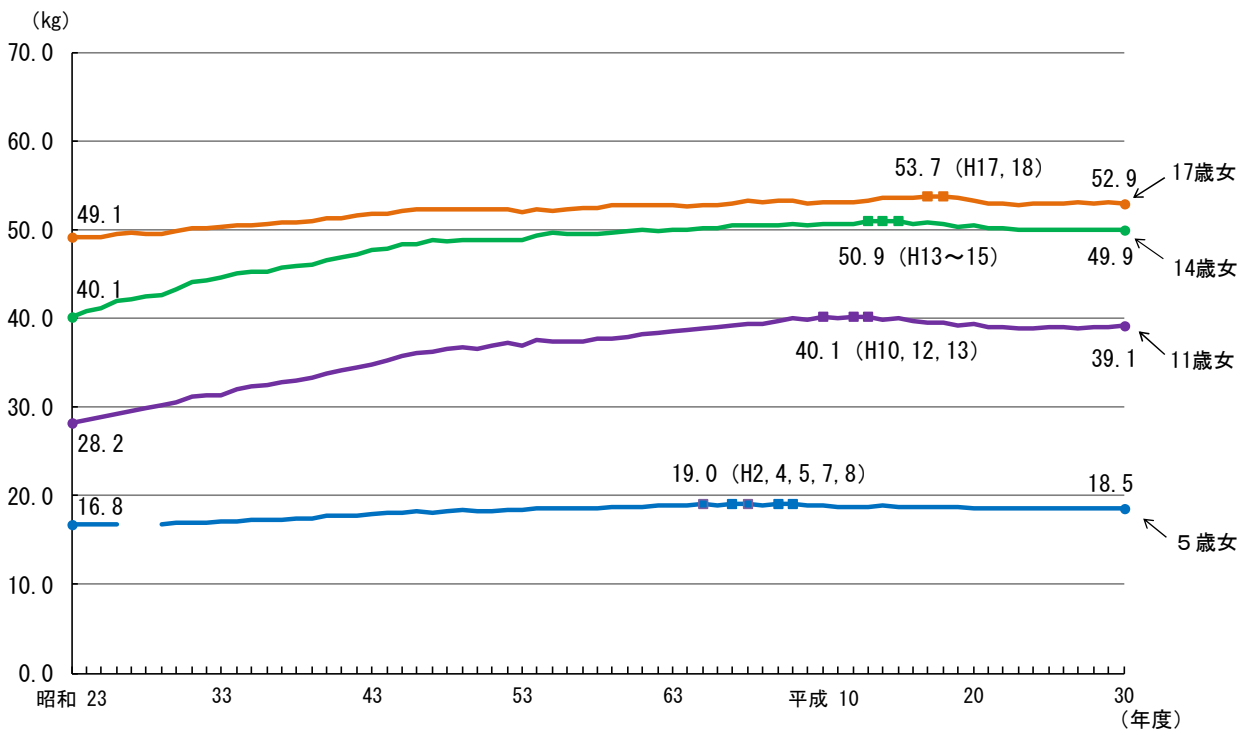
(注) 網掛け部分は、5～17歳のうち前年度差及び世代間差の男女それぞれの増加分の最大値を示す。

図3 体重の平均値の推移

○男子



○女子



(注) 5歳については、昭和27年度及び昭和28年度は調査していない。

④ 平成12年度生まれ（30年度17歳）の年間発育量をみると、男子では11歳時から14歳時に発育量が著しくなっており、11歳時に最大の発育量を示している。

女子では、10歳時から11歳時に発育量が著しくなっており、10歳時に最大の発育量を示している。

また、この発育量を親の世代（昭和63年度17歳）と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は、親の世代より2歳早い11歳時となっており、5歳から8歳、10歳、11歳及び16歳で親の世代を上回っている。

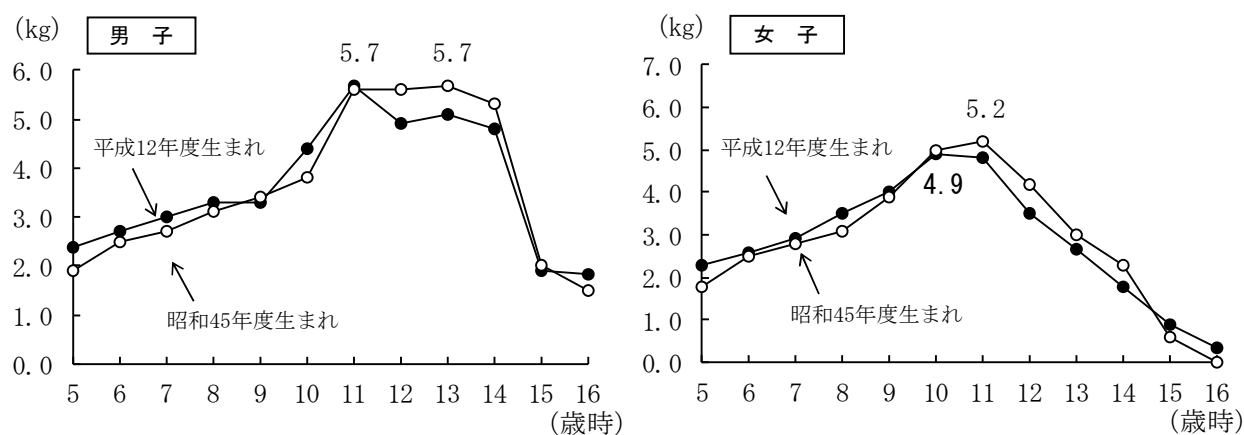
女子については、発育量が最大となる時期は親の世代より1歳早い10歳時となっており、5歳から9歳、15歳及び16歳で親の世代を上回っている。

表4 平成12年度生まれと昭和45年度生まれの者の年間発育量の比較（体重）

区 分		男 子		女 子	
		平成12年度生まれ (平成30年度17歳)	昭和45年度生まれ (親の世代の17歳)	平成12年度生まれ (平成30年度17歳)	昭和45年度生まれ (親の世代の17歳)
幼稚園	5歳時	2.4	1.9	2.3	1.8
	6歳時	2.7	2.5	2.6	2.5
小学校	7	3.0	2.7	2.9	2.8
	8	3.3	3.1	3.5	3.1
	9	3.3	3.4	4.0	3.9
	10	4.4	3.8	4.9	5.0
	11	5.7	5.6	4.8	5.2
	12歳時	4.9	5.6	3.5	4.2
中学校	13	5.1	5.7	2.7	3.0
	14	4.8	5.3	1.8	2.3
	15歳時	1.9	2.0	0.9	0.6
高等学校	16	1.8	1.5	0.3	0.0

(注) 1. 年間発育量とは、例えば、平成12年度生まれ（30年度17歳）の「5歳時」の年間発育量は、平成19年度調査6歳の者の体重から18年度調査5歳の者の体重を引いた数値である。
2. 網掛け部分は、5～16歳時のうち最大の年間発育量を示す。

図4 平成12年度生まれと昭和45年度生まれの者の年間発育量の比較（体重）



(3) 世代間比較（身長，体重）（表5）

子世代，親の世代（30年前），祖父母世代（55年前）を比較すると，14歳女子の親の世代と子世代の平均体重及び17歳女子の親の世代と子世代の平均身長は同じ数値となっているが，それ以外では身長・体重とも各世代間で増加していることがわかる。全体的には祖父母世代から親の世代が大きく増加している。親の世代と子世代の間でも増加しているが，祖父母世代と親の世代の間に比べると増加の割合は小さい。

表5 世代間比較（身長・体重）

8歳（小学校3年生）

区 分	平均身長（cm）		平均体重（kg）	
	男	女	男	女
祖父母世代（昭和38年度） （昭和29年度生まれ）	123.2	122.2	23.6	23.1
親の世代（昭和63年度） （昭和54年度生まれ）	127.9	127.2	26.9	26.3
子世代（平成30年度） （平成21年度生まれ）	128.1	127.3	27.2	26.4

11歳（小学校6年生）

区 分	平均身長（cm）		平均体重（kg）	
	男	女	男	女
祖父母世代（昭和38年度） （昭和26年度生まれ）	137.5	139.3	31.5	32.9
親の世代（昭和63年度） （昭和51年度生まれ）	144.1	145.9	37.4	38.5
子世代（平成30年度） （平成18年度生まれ）	145.2	146.8	38.4	39.1

14歳（中学校3年生）

区 分	平均身長（cm）		平均体重（kg）	
	男	女	男	女
祖父母世代（昭和38年度） （昭和23年度生まれ）	157.1	151.8	46.6	45.8
親の世代（昭和63年度） （昭和48年度生まれ）	164.1	156.3	53.6	49.9
子世代（平成30年度） （平成15年度生まれ）	165.3	156.6	54.0	49.9

17歳（高校3年生）

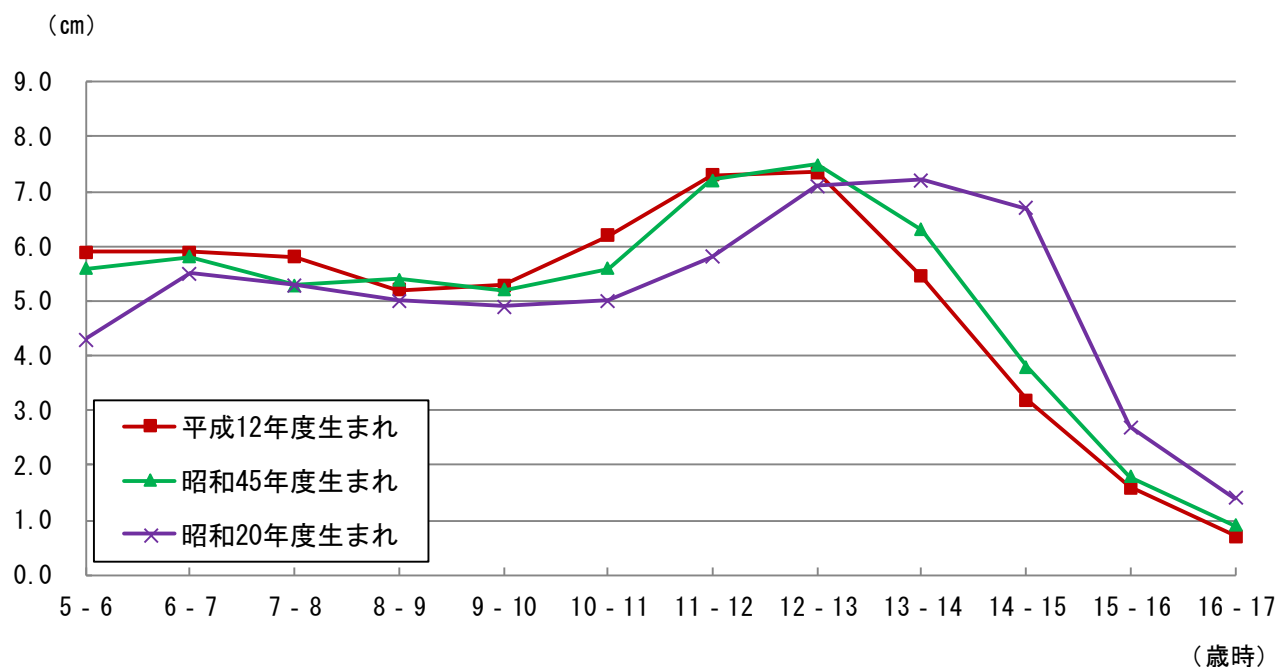
区 分	平均身長（cm）		平均体重（kg）	
	男	女	男	女
祖父母世代（昭和38年度） （昭和20年度生まれ）	165.9	154.4	56.7	50.8
親の世代（昭和63年度） （昭和45年度生まれ）	170.3	157.8	61.8	52.7
子世代（平成30年度） （平成12年度生まれ）	170.6	157.8	62.4	52.9

(4) 年間発育量の世代間比較（身長，体重）（図5-1，図5-2）

年間発育量を世代間で比較すると，男子，女子共に身長，体重のいずれも，現代に近い世代ほど早期に増加している。

図5-1 年間発育量の世代間比較（男子）

○身長



○体重

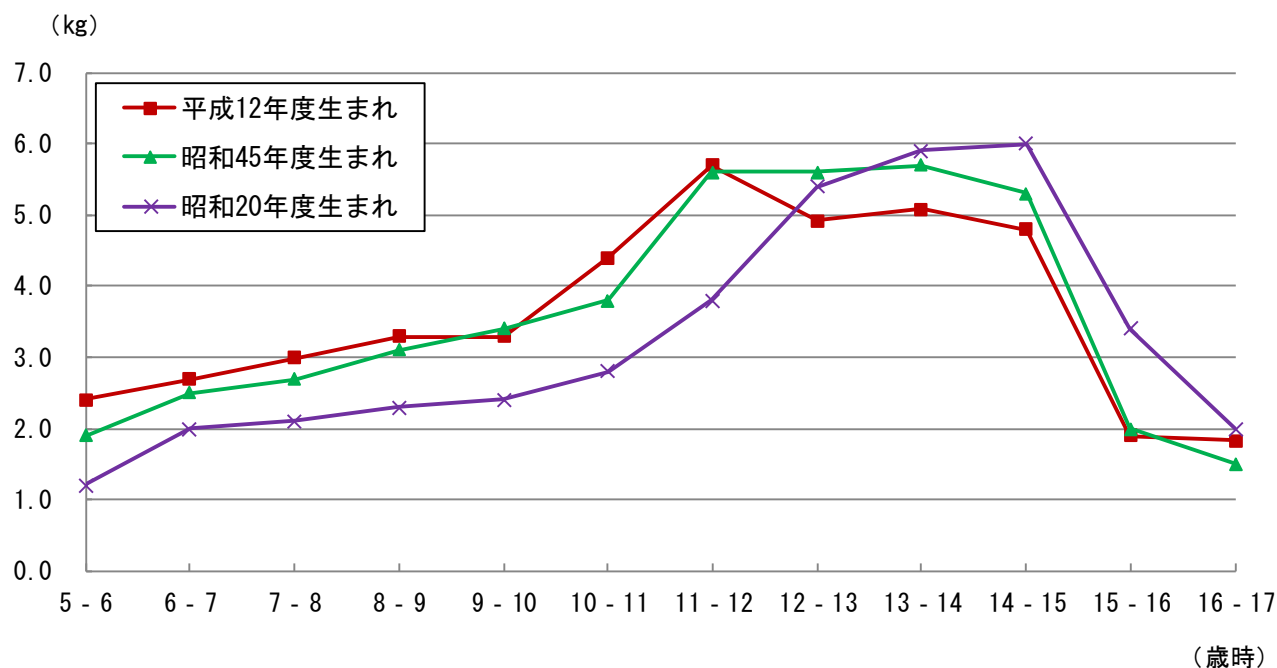
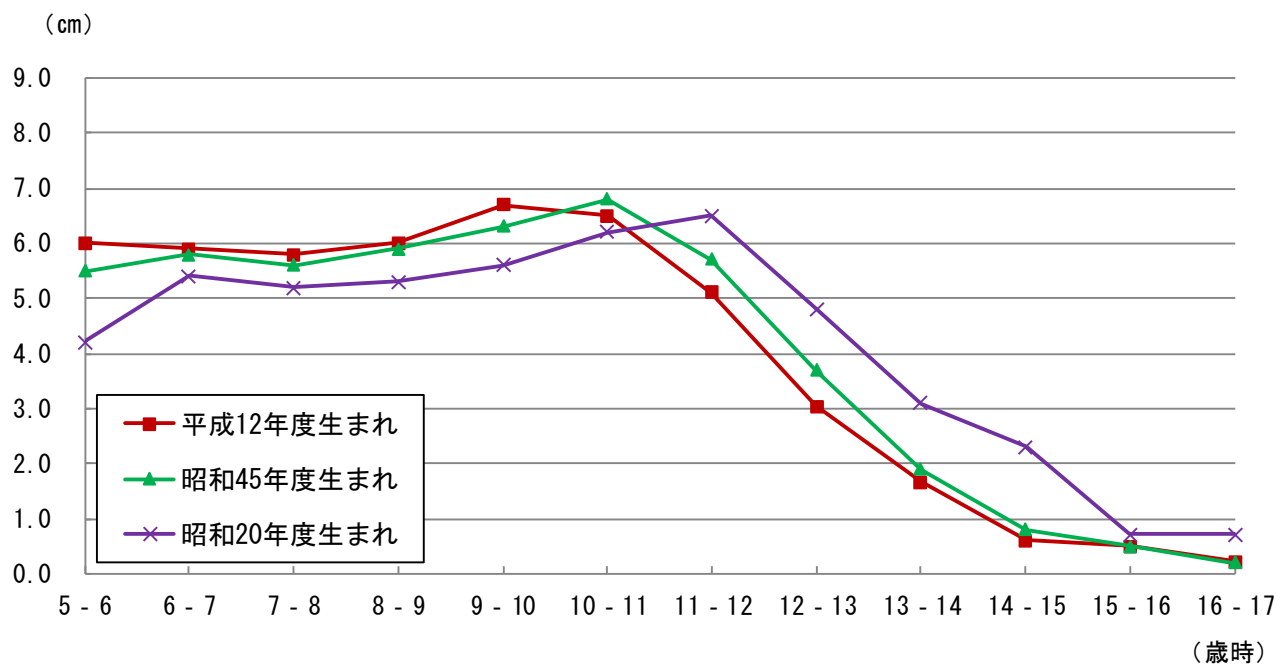
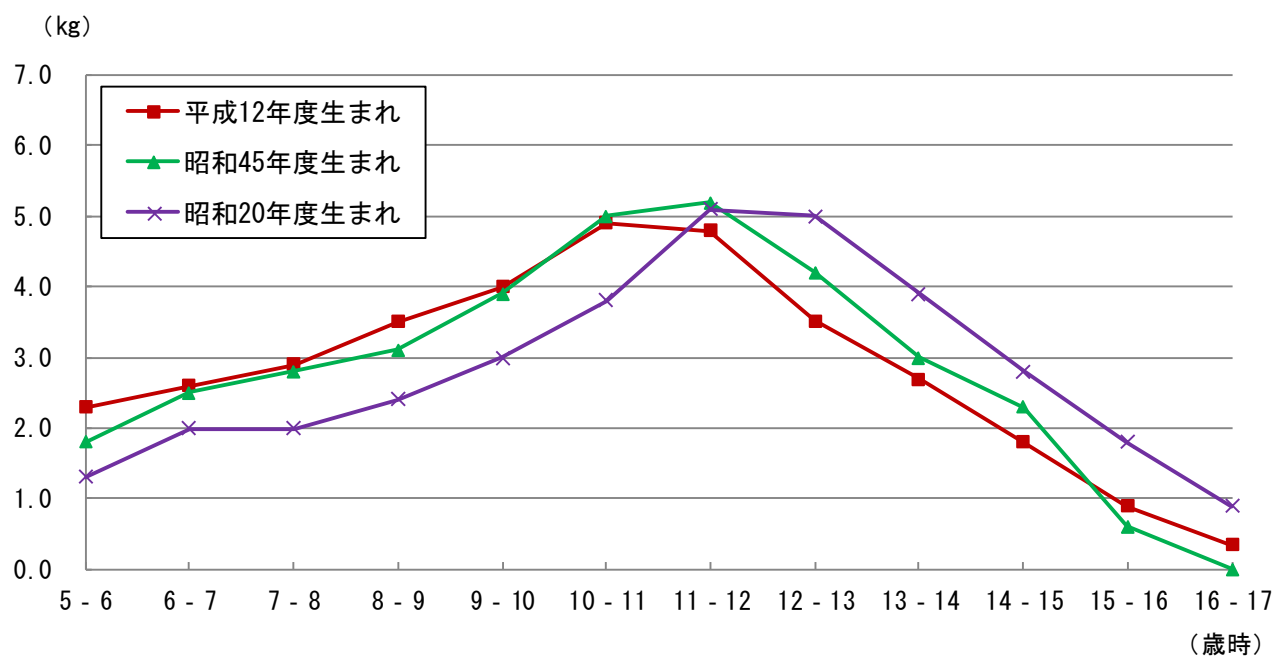


図 5 - 2 年間発育量の世代間比較（女子）

○身長



○体重



2 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率（表 6，図 6，図 7）

肥満傾向児の出現率は，前年度と比較すると，男子では 5 歳，15 歳及び 17 歳を除いた各年齢，女子では 8 歳，9 歳，13 歳，16 歳及び 17 歳を除いた各年齢で増加している。

なお，男子，女子共に，昭和 52 年度以降，肥満傾向児の出現率は増加傾向であったが，平成 15 年度あたりからおおむね減少傾向となっている。

痩身傾向児の出現率は，前年度と比較すると，男子では 5 歳から 7 歳及び 11 歳から 13 歳の各年齢，女子では 6 歳，7 歳，9 歳，12 歳，13 歳，15 歳及び 17 歳の各年齢で減少している。

なお，昭和 52 年度以降，男子の痩身傾向児の出現率はおおむね増加傾向となっている。

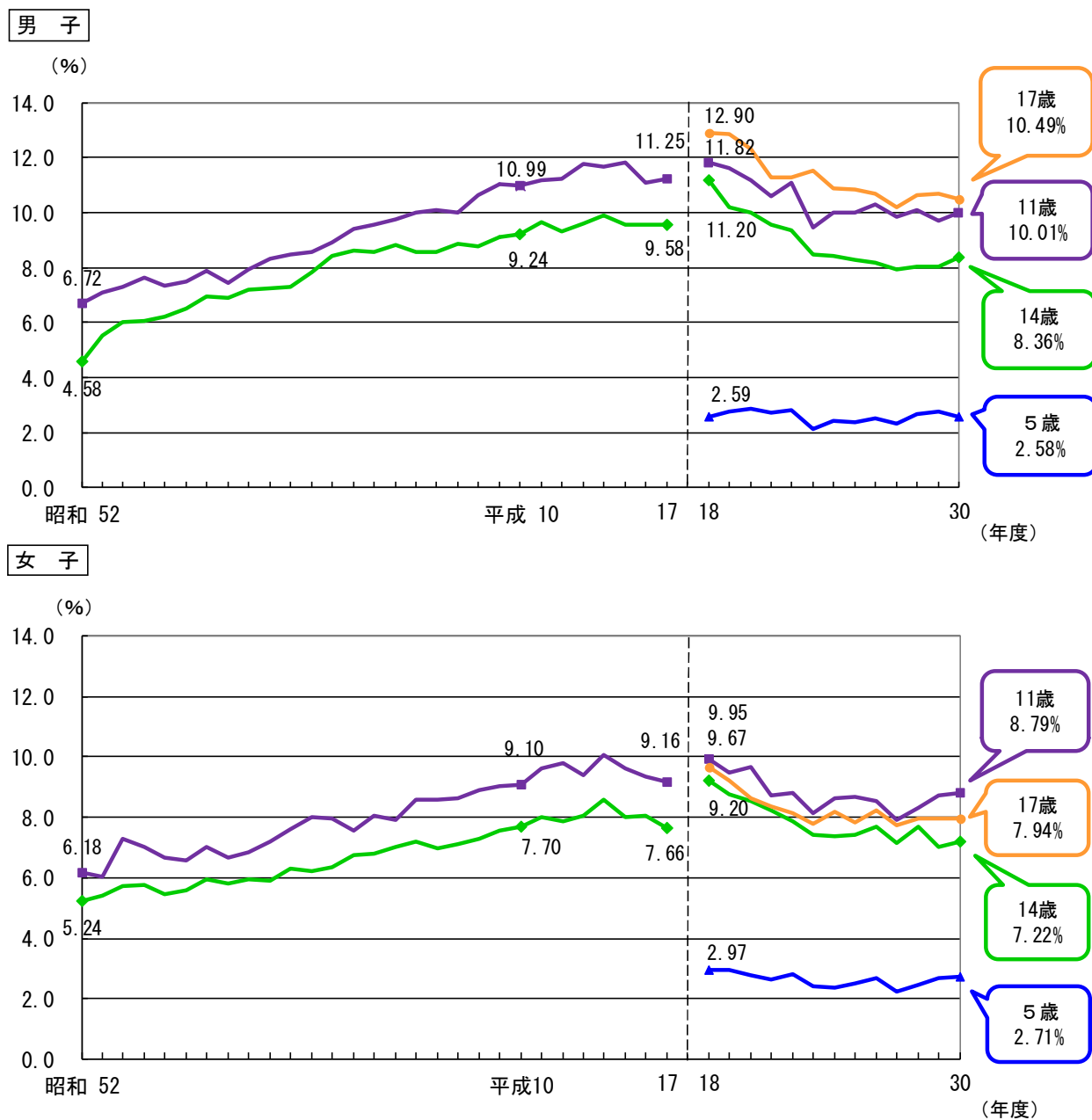
表 6 年齢別 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

(%)

区 分		肥満傾向児						
		男子			女子			
		平成30年度 A	29年度 B	前年度差 A－B	平成30年度 A	29年度 B	前年度差 A－B	
幼稚園 小学校 中学校 高等学校	5 歳	2. 58	2. 78	△ 0. 20	2. 71	2. 67	0. 04	
	6 歳	4. 51	4. 39	0. 12	4. 47	4. 42	0. 05	
		7	6. 23	5. 65	0. 58	5. 53	5. 24	0. 29
		8	7. 76	7. 24	0. 52	6. 41	6. 55	△ 0. 14
		9	9. 53	9. 52	0. 01	7. 69	7. 70	△ 0. 01
		10	10. 11	9. 99	0. 12	7. 82	7. 74	0. 08
	11	10. 01	9. 69	0. 32	8. 79	8. 72	0. 07	
		12 歳	10. 60	9. 89	0. 71	8. 45	8. 01	0. 44
			13	8. 73	8. 69	0. 04	7. 37	7. 45
	14		8. 36	8. 03	0. 33	7. 22	7. 01	0. 21
	15 歳	11. 01	11. 57	△ 0. 56	8. 35	7. 96	0. 39	
		16	10. 58	9. 93	0. 65	6. 93	7. 38	△ 0. 45
		17	10. 49	10. 71	△ 0. 22	7. 94	7. 95	△ 0. 01

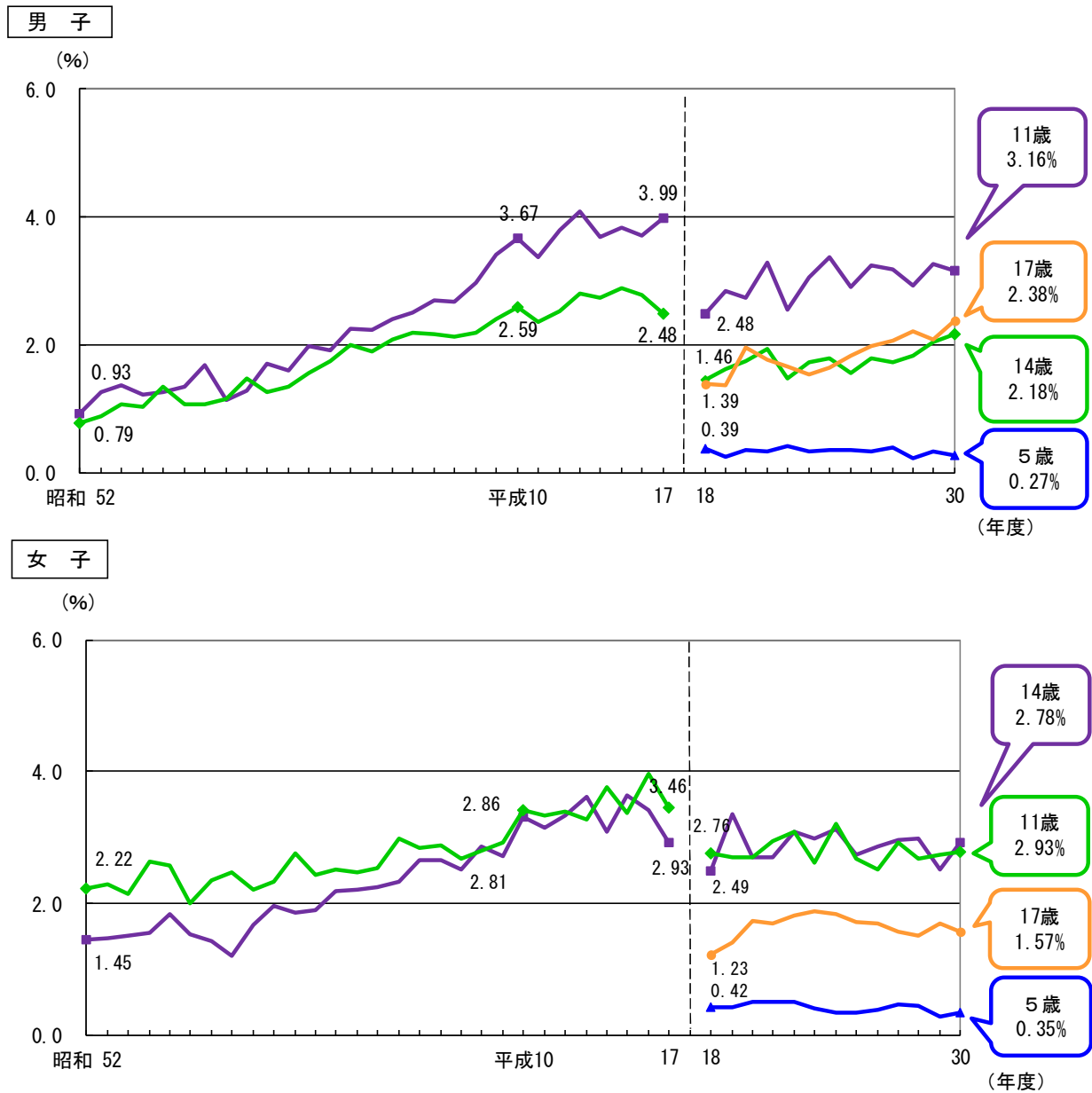
区 分		痩身傾向児						
		男子			女子			
		平成30年度 A	29年度 B	前年度差 A－B	平成30年度 A	29年度 B	前年度差 A－B	
幼稚園 小学校 中学校 高等学校	5 歳	0. 27	0. 33	△ 0. 06	0. 35	0. 29	0. 06	
	6 歳	0. 31	0. 47	△ 0. 16	0. 63	0. 64	△ 0. 01	
		7	0. 39	0. 53	△ 0. 14	0. 53	0. 61	△ 0. 08
		8	0. 95	0. 95	0. 00	1. 19	1. 07	0. 12
		9	1. 71	1. 57	0. 14	1. 69	1. 86	△ 0. 17
		10	2. 87	2. 66	0. 21	2. 65	2. 43	0. 22
	11	3. 16	3. 27	△ 0. 11	2. 93	2. 52	0. 41	
		12 歳	2. 79	2. 96	△ 0. 17	4. 18	4. 36	△ 0. 18
			13	2. 21	2. 26	△ 0. 05	3. 32	3. 69
	14		2. 18	2. 05	0. 13	2. 78	2. 74	0. 04
	15 歳	3. 24	3. 01	0. 23	2. 22	2. 24	△ 0. 02	
		16	2. 78	2. 50	0. 28	2. 00	1. 87	0. 13
		17	2. 38	2. 09	0. 29	1. 57	1. 69	△ 0. 12

図6 肥満傾向児の出現率の推移



- (注) 1. 平成18年度から肥満・痩身傾向児の算出方法を変更しているため、平成17年度までの数値と単純な比較はできない。
2. 5歳及び17歳は、平成18年度から調査を実施している。次の図においても同じ。

図7 痩身傾向児の出現率の推移



[肥満・痩身傾向児の算出方法について]

平成 17 年度まで、性別・年齢別に身長別平均体重を求め、その平均体重の 120% 以上の体重の者を肥満傾向児、80% 以下の者を痩身傾向児としていたが、18 年度から、性別、年齢別、身長別標準体重から肥満度（過体重度）を算出し、肥満度が 20% 以上の者を肥満傾向児、-20% 以下の者を痩身傾向児としている。

肥満度の求め方は次のとおりである。

肥満度（過体重度）

$$= \text{〔実測体重(kg) - 身長別標準体重(kg)〕} \div \text{身長別標準体重(kg)} \times 100 (\%)$$

$$\text{※ 身長別標準体重 (kg)} = a \times \text{実測身長 (cm)} - b$$

年齢 \ 係数	男		女	
	a	b	a	b
5	0.386	23.699	0.377	22.750
6	0.461	32.382	0.458	32.079
7	0.513	38.878	0.508	38.367
8	0.592	48.804	0.561	45.006
9	0.687	61.390	0.652	56.992
10	0.752	70.461	0.730	68.091
11	0.782	75.106	0.803	78.846
12	0.783	75.642	0.796	76.934
13	0.815	81.348	0.655	54.234
14	0.832	83.695	0.594	43.264
15	0.766	70.989	0.560	37.002
16	0.656	51.822	0.578	39.057
17	0.672	53.642	0.598	42.339

出典：公益財団法人日本学校保健会「児童生徒の健康診断マニュアル（平成 27 年度改訂版）」

（参考）平成 30 年度調査の平均身長の場合の標準体重

年齢 \	男			女		
	平均身長 (cm)	平均身長時の 標準体重 (kg)	平均体重 (kg)	平均身長 (cm)	平均身長時の 標準体重 (kg)	平均体重 (kg)
5	110.3	18.9	18.9	109.4	18.5	18.5
6	116.5	21.3	21.4	115.6	20.9	20.9
7	122.5	24.0	24.1	121.5	23.4	23.5
8	128.1	27.0	27.2	127.3	26.4	26.4
9	133.7	30.5	30.7	133.4	30.0	30.0
10	138.8	33.9	34.1	140.1	34.2	34.1
11	145.2	38.4	38.4	146.8	39.0	39.1
12	152.7	43.9	44.0	151.9	44.0	43.7
13	159.8	48.9	48.8	154.9	47.2	47.2
14	165.3	53.8	54.0	156.6	49.8	49.9
15	168.4	58.0	58.6	157.1	51.0	51.6
16	169.9	59.6	60.6	157.6	52.0	52.5
17	170.6	61.0	62.4	157.8	52.0	52.9

3 健康状態

(1) 疾病・異常の被患率等別状況（表7）

疾病・異常を被患率等別にみると、幼稚園及び小学校においては「むし歯（う歯）」の者の割合が最も高く、次いで「裸眼視力1.0未満の者」の順となっている。

中学校、高等学校においては、「裸眼視力1.0未満の者」の割合が最も高く、次いで「むし歯（う歯）」の順となっている。

表7 疾病・異常の被患率等

区 分		幼 稚 園	小 学 校	中 学 校	高 等 学 校
60%以上 ～ 70%未満					裸眼視力1.0未満の者
50 ～ 60				裸眼視力1.0未満の者	
40 ～ 50			むし歯（う歯）		むし歯（う歯）
30 ～ 40		むし歯（う歯）	裸眼視力1.0未満の者	むし歯（う歯）	
20 ～ 30		裸眼視力1.0未満の者			
10 ～ 20			鼻・副鼻腔疾患	鼻・副鼻腔疾患	
1 ～ 10	8 ～ 10				鼻・副鼻腔疾患
	6 ～ 8		歯・口腔のその他の疾病・異常 耳疾患		
	4 ～ 6		眼の疾病・異常 歯列・咬合	眼の疾病・異常 歯列・咬合 歯垢の状態 耳疾患 歯・口腔のその他の疾病・異常 歯肉の状態	歯垢の状態 歯肉の状態 歯列・咬合
	2 ～ 4	歯列・咬合 鼻・副鼻腔疾患 耳疾患 歯・口腔のその他の疾病・異常 アトピー性皮膚炎	ぜん息 アトピー性皮膚炎 歯垢の状態 心電図異常	心電図異常 蛋白検出の者 ぜん息 アトピー性皮膚炎 脊柱・胸部・四肢の状態	眼の疾病・異常 蛋白検出の者 心電図異常 耳疾患 アトピー性皮膚炎
	1 ～ 2	ぜん息 眼の疾病・異常 口腔咽喉頭疾患・異常 その他の皮膚疾患 蛋白検出の者	歯肉の状態 栄養状態 口腔咽喉頭疾患・異常 脊柱・胸部・四肢の状態	栄養状態 心臓の疾病・異常	ぜん息 脊柱・胸部・四肢の状態 歯・口腔のその他の疾病・異常
0.1 ～ 1	0.5 ～ 1	歯垢の状態	蛋白検出の者 心臓の疾病・異常 難聴 その他の皮膚疾患	口腔咽喉頭疾患・異常	栄養状態 心臓の疾病・異常 顎関節
	0.1 ～ 0.5	言語障害 歯肉の状態 心臓の疾病・異常 栄養状態 脊柱・胸部・四肢の状態	言語障害 腎臓疾患 顎関節	難聴 顎関節 その他の皮膚疾患 腎臓疾患 尿糖検出の者 言語障害	口腔咽喉頭疾患・異常 難聴 その他の皮膚疾患 尿糖検出の者 腎臓疾患
0.1%未満		顎関節 腎臓疾患	尿糖検出の者 結核	結核	言語障害 結核

- (注) 1. 「口腔咽喉頭疾患・異常」とは、アデノイド、扁桃肥大、咽喉炎、喉頭炎、扁桃炎、音声言語異常のある者等である。
2. 「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常、唾石、癒合歯、要注意乳歯等のある者等である。
3. 「その他の皮膚疾患」とは、伝染性皮膚疾患、毛髪疾患等、アトピー性皮膚炎以外の皮膚疾患と判定された者である。
4. 「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。
5. 「蛋白検出の者」とは、尿検査のうち、蛋白第1次検査の結果、尿中に蛋白が検出（陽性（＋以上）又は擬陽性（±）と判定）された者である。
6. 「尿糖検出の者」とは、尿検査のうち、糖第1次検査の結果、尿中に糖が検出（陽性（＋以上）と判定）された者である。

(2) 主な疾病・異常等の推移 (表8)

疾病・異常等のうち主なものについて、その推移をみると表8のとおりである。

表8 主な疾病・異常等の推移総括表

											(%)
区 分	むし 歯 (う 歯)	ア ト ピー 性 皮 膚 炎	ぜ ん 息	裸 眼 視 力 1.0 未 満 の 者	心 電 図 異 常	蛋 白 検 出 の 者	四 肢 の 状 態 (※注 2)	せ き 柱 ・ 胸 郭 ・	耳 疾 患	鼻 ・ 副 鼻 腔 疾 患	口 腔 咽 喉 頭 疾 患 ・ 異 常
幼稚園	平成20年度	50.25	3.54	2.65	28.93	…	0.49	(0.15)	2.80	3.78	1.74
	25	39.51	2.39	2.13	24.53	…	0.89	(0.19)	2.58	3.44	1.37
	26	38.46	2.37	1.85	26.53	…	0.74	(0.16)	2.27	3.13	1.74
	27	36.23	2.52	2.14	26.82	…	0.76	(0.11)	2.23	3.57	1.30
	28	35.64	2.39	2.30	27.94	…	0.65	0.28	2.83	3.58	1.14
	29	35.45	2.09	1.80	24.48	…	0.97	0.16	2.25	2.86	1.31
	30	35.10	2.04	1.56	26.69	…	1.03	0.23	2.31	2.90	1.45
小学校	平成20年度	63.79	3.49	3.89	29.87	2.67	0.69	(0.33)	5.23	11.86	1.75
	25	54.14	3.06	4.15	30.52	2.62	0.74	(0.38)	5.43	12.07	1.32
	26	52.54	3.22	3.88	30.16	2.34	0.84	(0.46)	5.70	12.31	1.50
	27	50.76	3.52	3.95	30.97	2.35	0.80	(0.54)	5.47	11.91	1.23
	28	48.89	3.18	3.69	31.46	2.44	0.76	1.83	6.09	12.91	1.38
	29	47.06	3.26	3.87	32.46	2.39	0.87	1.16	6.24	12.84	1.28
	30	45.30	3.40	3.51	34.10	2.40	0.80	1.14	6.47	13.04	1.34
中学校	平成20年度	56.00	2.66	3.00	52.60	3.45	2.49	(0.94)	3.55	10.82	1.10
	25	44.59	2.48	3.22	52.79	3.44	2.45	(0.83)	3.89	11.11	0.67
	26	42.37	2.52	3.03	53.04	3.33	3.00	(1.04)	4.00	11.21	0.67
	27	40.49	2.72	3.00	54.05	3.17	2.91	(1.02)	3.63	10.61	0.58
	28	37.49	2.65	2.90	54.63	3.30	2.57	3.43	4.47	11.52	0.69
	29	37.32	2.66	2.71	56.33	3.40	3.18	2.41	4.48	11.27	0.64
	30	35.41	2.85	2.71	56.04	3.27	2.91	2.40	4.72	10.99	0.75
高等学校	平成20年度	65.48	2.32	1.82	57.98	3.10	2.82	(0.58)	2.02	8.81	0.59
	25	55.12	2.14	1.90	65.84	3.19	2.68	(0.58)	2.15	8.74	0.47
	26	53.08	2.14	1.93	62.89	3.25	3.14	(0.70)	2.05	8.72	0.54
	27	52.49	2.05	1.93	63.79	3.33	2.95	(0.74)	2.04	7.34	0.44
	28	49.18	2.32	1.91	65.99	3.39	3.29	2.46	2.30	9.41	0.42
	29	47.30	2.27	1.91	62.30	3.27	3.52	1.49	2.59	8.61	0.50
	30	45.36	2.58	1.78	67.09	3.34	2.95	1.40	2.45	9.86	0.31

注1:「心電図異常」については、6歳、12歳及び15歳のみ調査を実施している。

注2:「せき柱・胸郭・四肢の状態」については平成27年度までは「せき柱・胸郭」のみを調査。

 : 過去最高
 : 過去最低

○ 「むし歯（う歯）」（表 9，図 8～図 10）

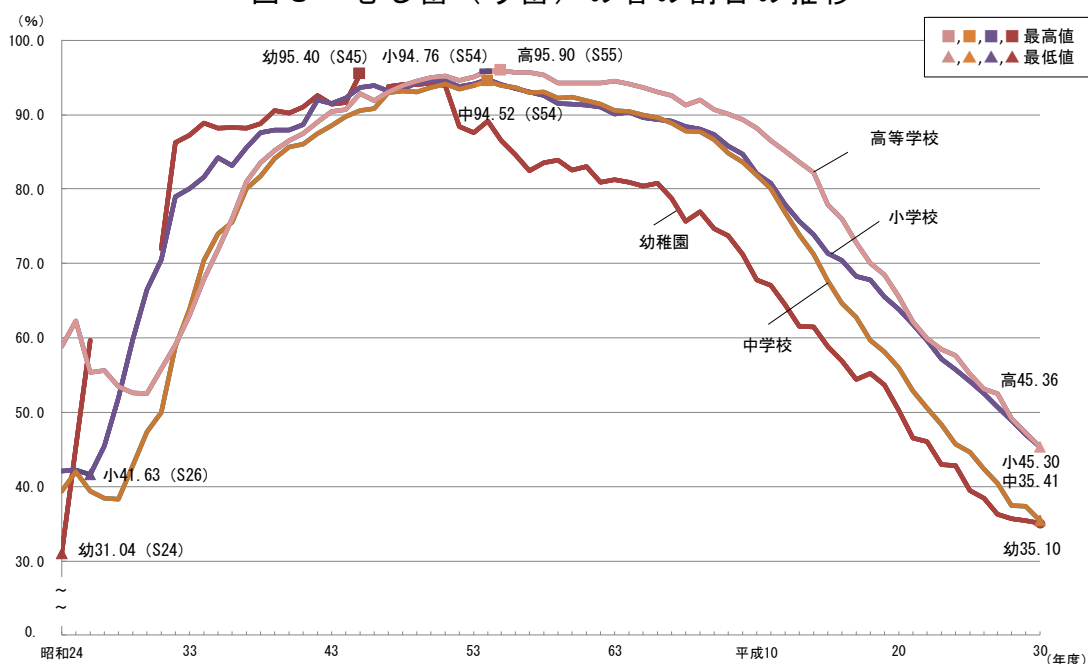
- ① 平成 30 年度の「むし歯」の者の割合（処置完了者を含む。以下同じ。）は、幼稚園 35.10%，小学校 45.30%，中学校 35.41%，高等学校 45.36%となっており，全ての学校段階で前年度より減少しており，中学校及び高等学校においては過去最低である。
- ② 「むし歯」の者の割合の推移（図 8）をみると，幼稚園は昭和 45 年度，小学校，中学校及び高等学校では昭和 50 年代半ばにピークを迎え，その後は減少傾向にある。また，「未処置歯のある者」の割合の推移（図 9）は，幼稚園を除く全ての学校段階で昭和 23 年度の調査開始以降，過去最低となっている。
- ③ 「むし歯」の者の割合を年齢別（図 10）にみると，9 歳が 51.90%と最も高くなっている。また，処置完了者の割合は，8 歳以降，未処置歯のある者の割合を上回っている。

表 9 むし歯（う歯）の者の割合の推移 (%)

区 分		昭和63年度	平成10	20	26	27	28	29	30
幼稚園	計	81.23	67.73	50.25	38.46	36.23	35.64	35.45	35.10
	処置完了者	26.76	25.71	20.34	15.68	15.12	14.53	13.85	13.60
	未処置歯のある者	54.47	42.02	29.91	22.78	21.11	21.11	21.60	21.50
小学校	計	90.05	82.07	63.79	52.54	50.76	48.89	47.06	45.30
	処置完了者	34.74	40.08	30.89	26.23	25.76	24.73	24.07	23.07
	未処置歯のある者	55.31	41.99	32.90	26.30	25.00	24.16	22.99	22.23
中学校	計	90.54	81.89	56.00	42.37	40.49	37.49	37.32	35.41
	処置完了者	41.50	45.78	30.36	23.83	22.38	20.98	21.12	20.41
	未処置歯のある者	49.04	36.11	25.64	18.54	18.11	16.51	16.21	15.01
高等学校	計	94.45	88.18	65.48	53.08	52.49	49.18	47.30	45.36
	処置完了者	45.26	50.00	35.99	30.45	29.91	28.35	27.63	27.10
	未処置歯のある者	49.19	38.18	29.49	22.63	22.58	20.84	19.67	18.25

(注) 1. 四捨五入しているため計と内訳が一致しない場合がある。以下の各表において同じ。
2. 「むし歯（う歯）の者」は昭和24年度から調査を実施している。

図 8 むし歯（う歯）の者の割合の推移



(注) 幼稚園については，昭和 27～30 年度及び昭和 46 年度は調査していない。

図 9 未処置歯のある者の割合の推移

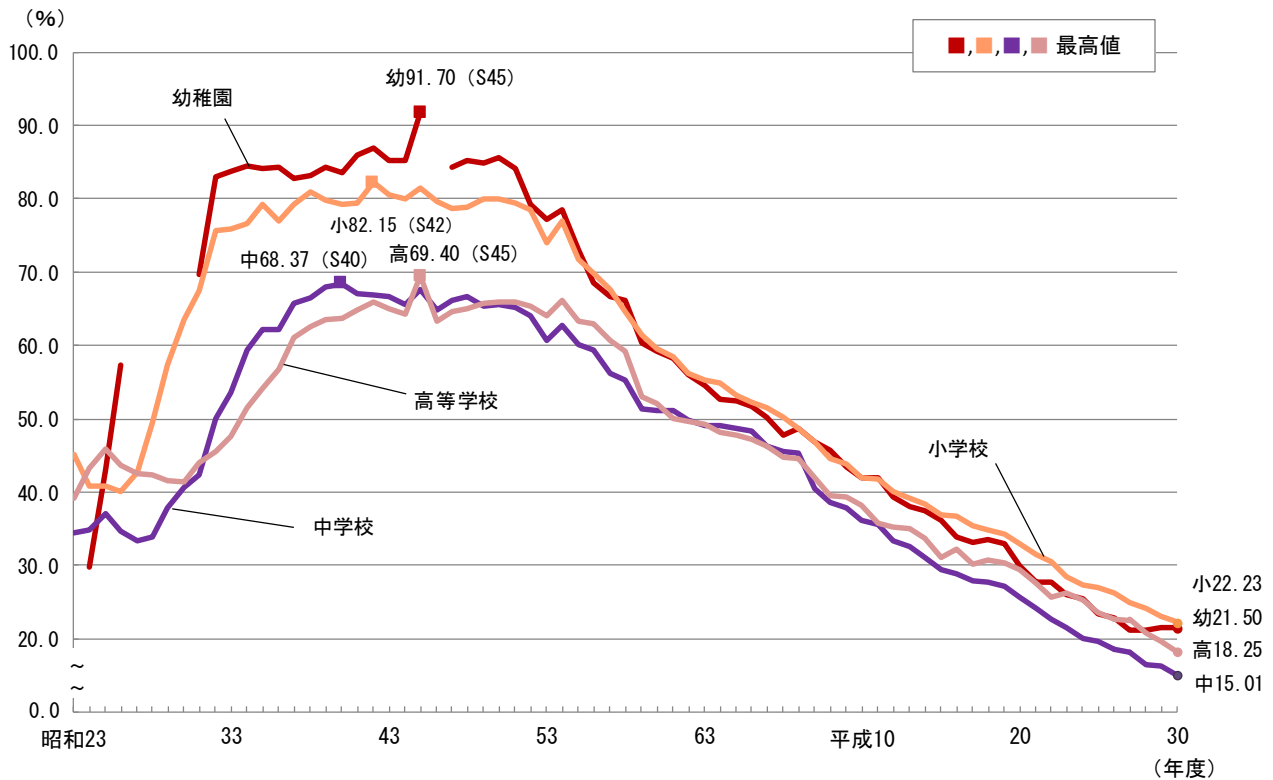
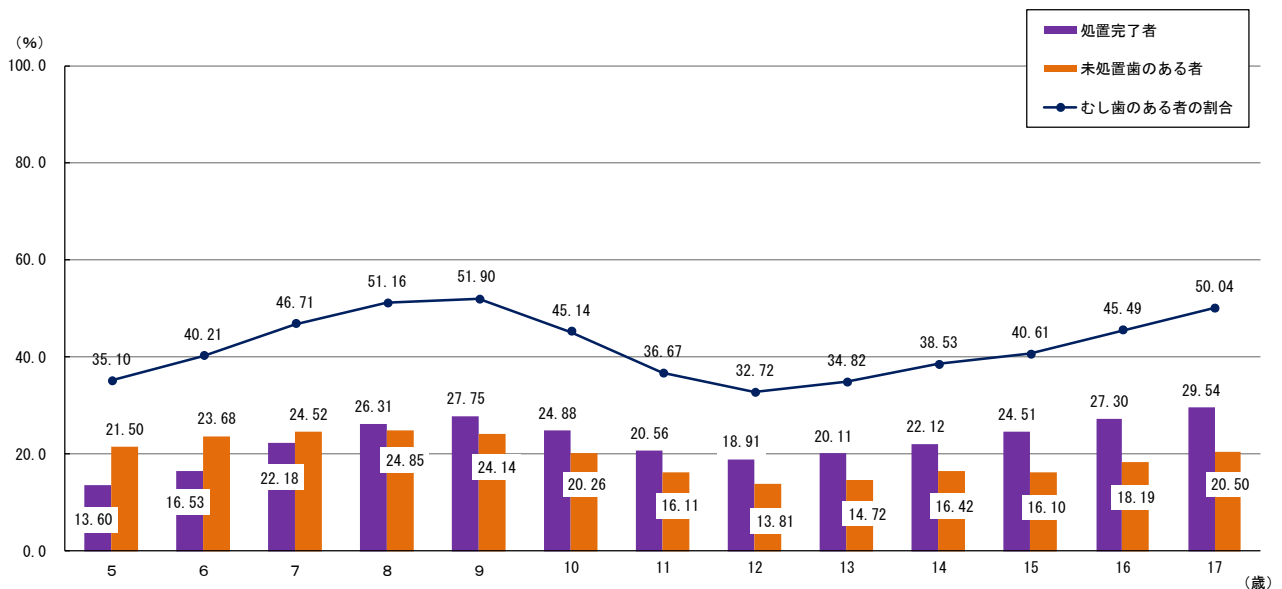


図 10 年齢別 むし歯（う歯）の者の割合等



（注）10歳から12歳において割合が減少するのは、乳歯が生え替わることが影響していると考えられる。

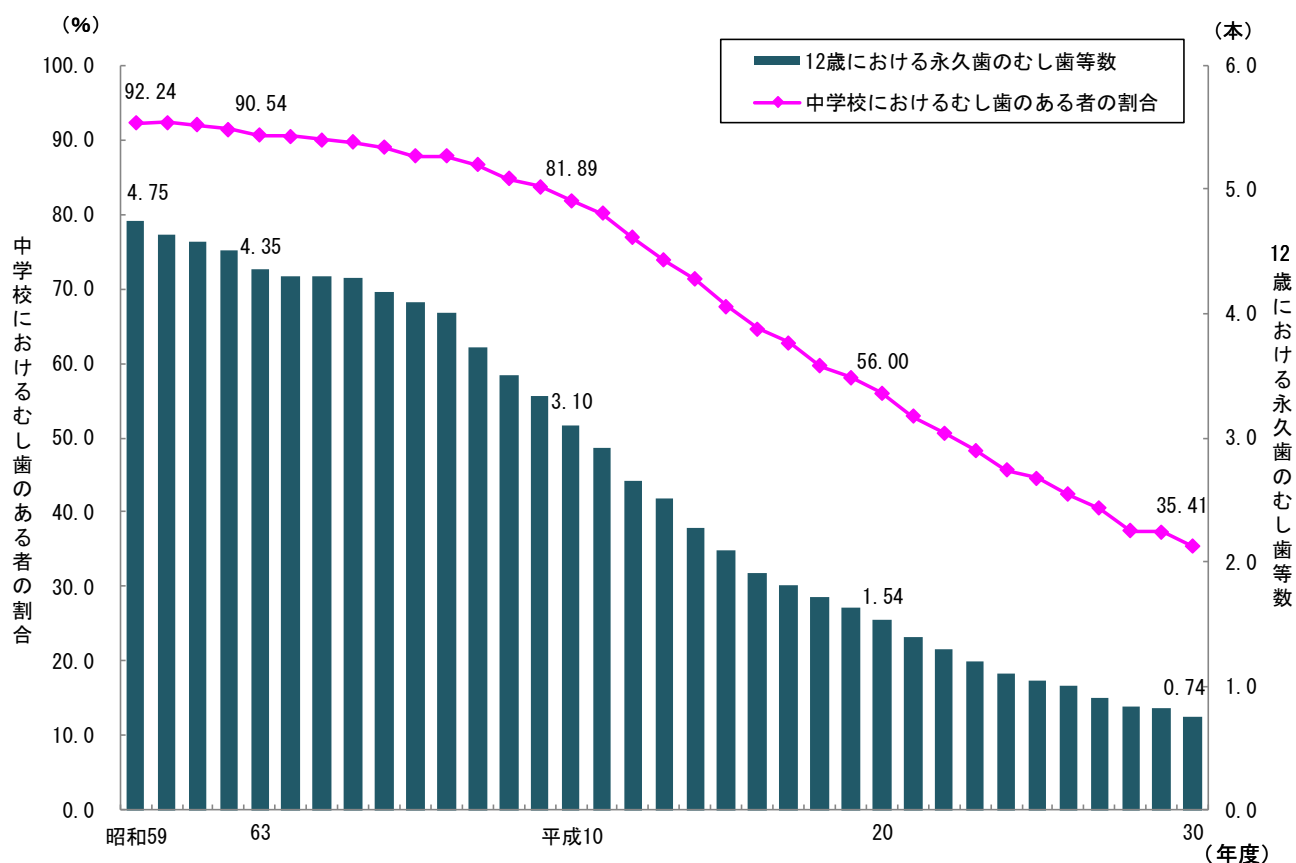
○ 「12 歳の永久歯の一人当たり平均むし歯（う歯）等数」（表 10，図 11）

中学校 1 年（12 歳）のみを調査対象としている永久歯の 1 人当たりの平均むし歯等数（喪失歯及び処置歯数を含む）は，前年度より 0.08 本減少して 0.74 本となり，昭和 59 年度の調査開始以降ほぼ毎年減少し，過去最低となっている。

表 10 12 歳の永久歯の一人当たり平均むし歯（う歯）等数

区 分		昭和63年度	平成10	20	26	27	28	29	30
計		4.35	3.10	1.54	1.00	0.90	0.84	0.82	0.74
喪失歯数		0.04	0.04	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01
むし歯 （う歯）	計	4.31	3.06	1.51	0.99	0.89	0.83	0.81	0.73
	処置歯数	3.09	2.25	0.96	0.64	0.55	0.51	0.52	0.47
	未処置歯数	1.22	0.81	0.55	0.35	0.34	0.31	0.30	0.27

図 11 中学校におけるむし歯（う歯）の被患率等の推移



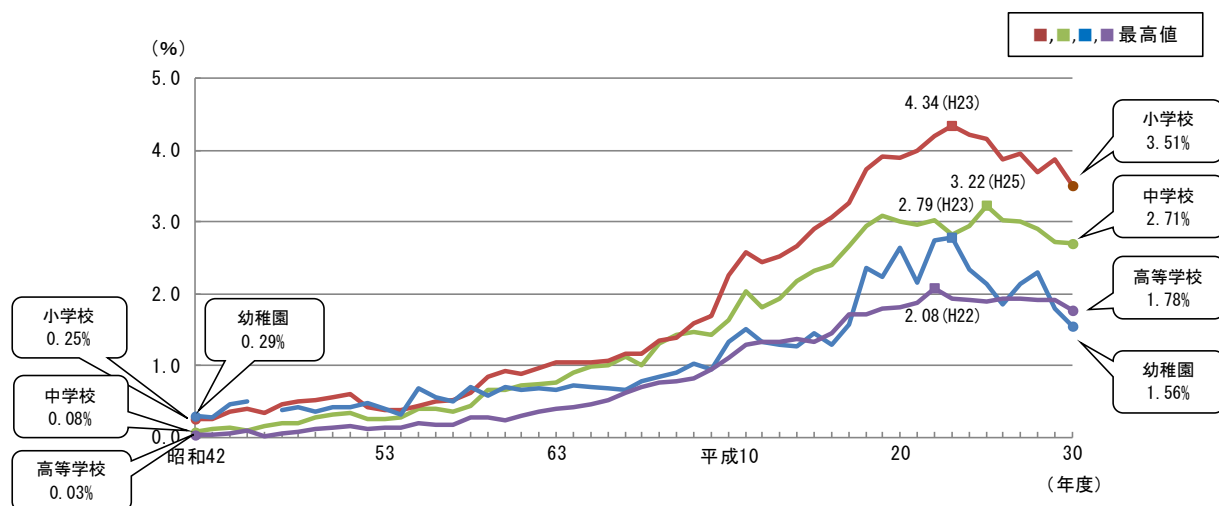
（注）「12 歳における永久歯のむし歯等数」は，昭和 59 年度から調査を実施している。

○ 「ぜん息」(表 8, 図 12, 図 13)

- ① 平成 30 年度の「ぜん息」の者の割合は、前年度と比較すると、中学校では同じ数値となっているが、幼稚園、小学校及び高等学校では減少している。

なお、昭和 42 年度以降、各学校段階において増加傾向にあったが、平成 22～25 年度にピークを迎えた後はおおむね減少傾向にある。

図 12 学校種別 ぜん息の者の推移

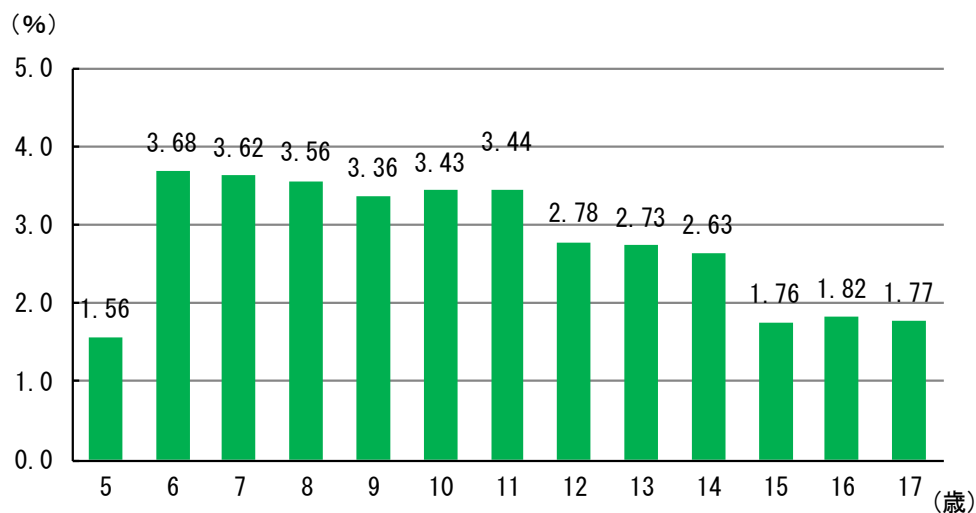


- (注) 1. 「ぜん息の者」は昭和 42 年度から調査を実施している。
2. 幼稚園 (5 歳) については、昭和 46 年度は調査していない。

- ② 年齢別 (図 13) にみると、6 歳から 11 歳の各年齢で 3 % を超えており、6 歳が 3.68% と最も高くなっている。

また、12 歳以降は年齢が進むにつれて減少傾向にある。

図 13 年齢別 ぜん息の者の割合



○ 「裸眼視力」（表 11，図 14，表 12）

- ① 平成 30 年度の「裸眼視力 1.0 未満の者」の割合は，幼稚園 26.69%，小学校 34.10%，中学校 56.04%，高等学校 67.09%となっている。前年度と比較すると，幼稚園，小学校及び高等学校では増加しており，小学校及び高等学校では過去最高となった。また，中学校でも過去最高となった昨年度と同様の高い割合となっている。「裸眼視力 0.3 未満の者」の割合は，幼稚園 0.87%，小学校 9.28%，中学校 25.54%，高等学校 39.13%となっており，小学校及び高等学校では過去最高となった。
- ② 視力非矯正者（眼鏡やコンタクトレンズを使用していない者）のうち，「裸眼視力 0.7 未満の者」の割合は，幼稚園 6.67%，小学校 14.22%，中学校 19.96%，高等学校 17.85%となっている。

表 11 裸眼視力 1.0 未満の者の推移

(%)										
区 分		昭和54年度	63	平成10	20	26	27	28	29	30
幼稚園	計	16.47	23.21	25.84	28.93	26.53	26.82	27.94	24.48	26.69
	1.0未満0.7以上	12.21	16.65	16.15	22.03	17.55	19.55	20.01	18.05	19.04
	0.7未満0.3以上	3.91	6.09	7.18	6.11	8.01	6.57	7.08	5.71	6.78
	0.3未満	0.35	0.48	0.51	0.78	0.97	0.70	0.85	0.72	0.87
小学校	計	17.91	19.59	26.34	29.87	30.16	30.97	31.46	32.46	34.10
	1.0未満0.7以上	9.47	8.34	10.49	11.23	10.72	11.12	11.16	11.48	12.01
	0.7未満0.3以上	5.77	7.12	9.91	11.60	11.29	11.53	11.68	12.25	12.81
	0.3未満	2.67	4.13	5.94	7.05	8.14	8.32	8.62	8.72	9.28
中学校	計	35.19	39.39	50.31	52.60	53.04	54.05	54.63	56.33	56.04
	1.0未満0.7以上	9.65	10.17	11.58	12.38	11.31	11.68	11.53	11.50	11.27
	0.7未満0.3以上	12.47	13.37	16.66	17.80	16.75	17.07	16.42	18.37	19.22
	0.3未満	13.06	15.85	22.07	22.42	24.97	25.31	26.68	26.46	25.54
高等学校	計	53.02	54.54	62.51	57.98	62.89	63.79	65.99	62.30	67.09
	1.0未満0.7以上	11.12	10.49	11.71	12.55	11.53	10.66	11.83	11.83	11.40
	0.7未満0.3以上	15.61	15.84	17.03	17.07	15.52	16.97	16.59	16.58	16.57
	0.3未満	26.29	28.22	33.77	28.36	35.84	36.16	37.58	33.89	39.13

（注）「裸眼視力1.0未満の者」は昭和54年度から調査を実施している。

図 14 裸眼視力 1.0 未満の者の割合の推移

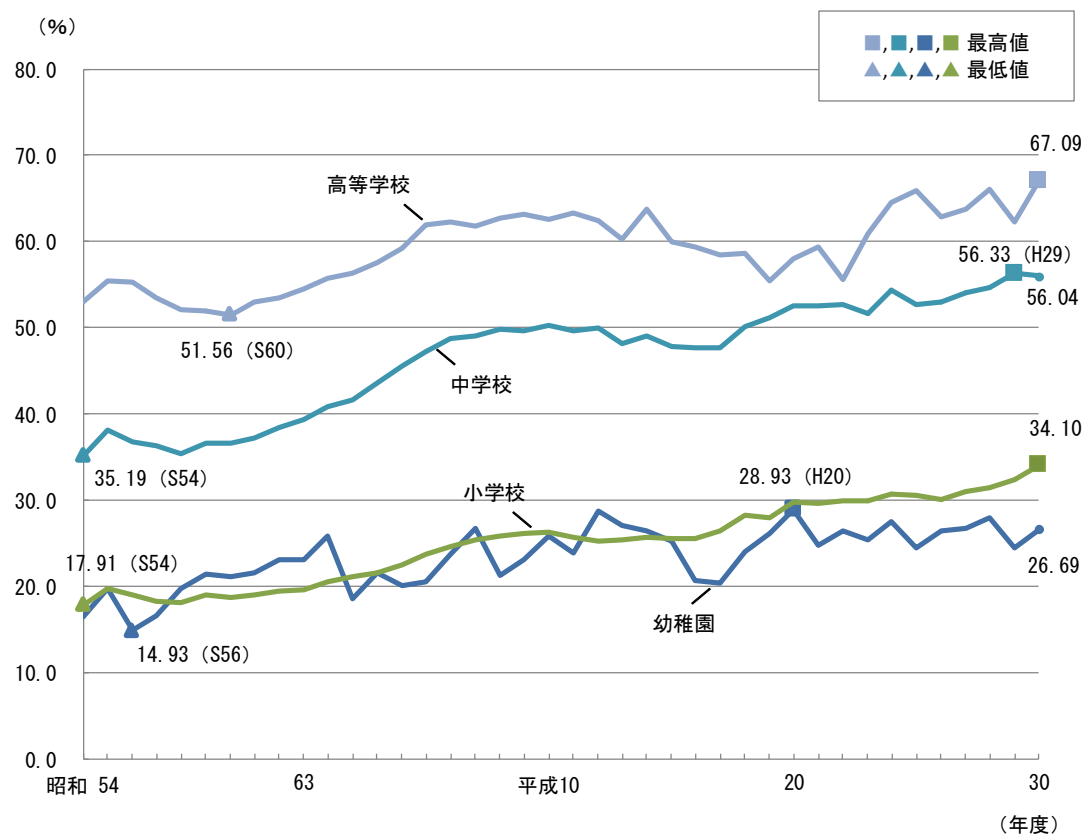


表 12 学校種別 視力非矯正者と視力矯正者の割合

(%)

区 分		計	視力非矯正者の裸眼視力				視力矯正者の裸眼視力			
			1.0以上	1.0未満 0.7以上	0.7未満 0.3以上	0.3未満	1.0以上	1.0未満 0.7以上	0.7未満 0.3以上	0.3未満
幼稚園	平成25年度	100.00	75.26	17.75	5.32	0.52	0.21	0.30	0.43	0.20
	26年度	100.00	73.15	17.20	7.42	0.81	0.32	0.35	0.59	0.16
	27年度	100.00	72.95	19.22	6.00	0.52	0.23	0.34	0.57	0.18
	28年度	100.00	71.80	19.74	6.68	0.59	0.26	0.28	0.40	0.25
	29年度	100.00	75.13	17.57	5.17	0.48	0.39	0.48	0.54	0.25
	30年度	100.00	73.00	18.64	6.11	0.56	0.31	0.40	0.67	0.31
小学校	平成25年度	100.00	68.89	9.90	8.93	3.23	0.59	0.79	2.51	5.15
	26年度	100.00	69.21	9.97	8.94	3.31	0.64	0.75	2.35	4.83
	27年度	100.00	68.30	10.24	9.15	3.47	0.73	0.88	2.37	4.85
	28年度	100.00	67.88	10.29	9.33	3.65	0.66	0.87	2.35	4.97
	29年度	100.00	66.80	10.59	9.81	3.75	0.74	0.89	2.44	4.97
	30年度	100.00	65.10	11.03	10.21	4.01	0.80	0.98	2.60	5.27
中学校	平成25年度	100.00	46.52	9.77	11.26	5.60	0.69	1.32	5.29	19.55
	26年度	100.00	46.20	9.81	10.88	5.59	0.76	1.50	5.87	19.38
	27年度	100.00	44.99	9.91	11.77	5.89	0.96	1.77	5.30	19.42
	28年度	100.00	44.82	10.49	11.46	7.40	0.55	1.04	4.96	19.28
	29年度	100.00	42.72	10.00	12.83	6.61	0.95	1.50	5.54	19.85
	30年度	100.00	42.31	9.35	12.76	7.20	1.65	1.92	6.46	18.33
高等学校	平成25年度	100.00	32.68	10.30	12.24	6.98	1.48	2.93	6.98	26.42
	26年度	100.00	35.45	9.72	9.93	7.01	1.66	1.81	5.60	28.82
	27年度	100.00	35.55	9.56	10.38	6.90	0.67	1.09	6.58	29.26
	28年度	100.00	33.43	11.06	12.03	7.77	0.57	0.77	4.56	29.81
	29年度	100.00	36.07	10.07	11.69	7.08	1.63	1.75	4.89	26.82
	30年度	100.00	32.51	10.42	11.06	6.79	0.39	0.97	5.51	32.33

(注) 1. 両眼で視力が異なる場合は、低い方の視力の記載により計上している。

2. 平成24年度から調査を実施している。

○ 「アトピー性皮膚炎」（表 8）

平成 30 年度の「アトピー性皮膚炎（^{がんけん}眼瞼皮膚炎等）」の者の割合は、幼稚園 2.04%，小学校 3.40%，中学校 2.85%，高等学校 2.58%となっており、前年度と比べると、幼稚園では減少しているが、小学校、中学校及び高等学校では増加している。幼稚園では過去最低となったが、中学校及び高等学校では過去最高となった。

○ 「心電図異常」（表 8） 6 歳，12 歳及び 15 歳時のみ

平成 30 年度の「心電図異常」の割合は、小学校（6 歳）で 2.40%，中学校（12 歳）で 3.27%，高等学校（15 歳）で 3.34%となっており、前年度と比べると中学校では減少しているが、小学校及び高等学校では増加している。

○ 「蛋白検出の者」（表 8）

平成 30 年度の「蛋白検出の者」（尿中に蛋白が検出された者）の割合は、幼稚園 1.03%，小学校 0.80%，中学校 2.91%，高等学校 2.95%となっており、前年度と比べると小学校、中学校及び高等学校では減少しているが、幼稚園では増加している。

○ 「耳疾患」（表 8）

平成 30 年度の「耳疾患」（中耳炎，内耳炎，外耳炎等）の者の割合は、幼稚園 2.31%，小学校 6.47%，中学校 4.72%，高等学校 2.45%となっており、前年度と比べると、高等学校では減少しているが、幼稚園，小学校及び中学校では増加している。小学校及び中学校では過去最高となった。

○ 「せき柱・胸郭・四肢の状態」（表 8）

平成 30 年度の「せき柱・胸郭・四肢の状態」の疾病及び異常の者の割合は、幼稚園 0.23%，小学校 1.14%，中学校 2.40%，高等学校 1.40%となっており、前年度と比べると、小学校、中学校及び高等学校では減少しているが、幼稚園では増加している。

○ 「鼻・副鼻腔疾患」（表 8）

平成 30 年度の「鼻・副鼻腔疾患」（^{ちくのう}蓄膿症，アレルギー性鼻炎（花粉症等）の者の割合は、幼稚園 2.90%，小学校 13.04%，中学校 10.99%，高等学校 9.86%となっており、前年度と比べると中学校では減少しているが、幼稚園，小学校及び高等学校では増加している。小学校及び高等学校では過去最高となった。

○ 「^{こうくういんこうとう}口腔咽喉頭疾患・異常」（表 8）

平成 30 年度の「^{こうくういんこうとう}口腔咽喉頭疾患・異常」（^{こうかくえん}口角炎，^{こうないえん}口内炎，^{へんとうえん}扁桃炎等）の者の割合は，幼稚園 1.45%，小学校 1.34%，中学校 0.75%，高等学校 0.31%となっており，前年度と比べると高等学校では減少し過去最低となったが，幼稚園，小学校及び中学校では増加している。